

# *The American* の一研究

——最後の決断をめぐる——

中 窪 靖

はじめに

*The American* (1877) は、一般に無垢なアメリカ人が伝統のあるまたは歴史のあるヨーロッパと対峙してある経験を得る物語であると解釈されている。また、その主人公を旧約聖書のアダムになぞらえて“アメリカのアダム”とする解釈もある。秋山 (1993) は、この小説を、「国際状況を主題とした作品で、長編小説としてはジェイムズの最初の成功作と言えるであろう。」としている<sup>1)</sup>。セルフメイドマンとしてのクリストファー・ニューマンは、これまでの彼の人生に欠けていたものをヨーロッパで埋め合わせようとする。彼にとっては、ヨーロッパの伝統は是非とも手中に収めたいものとなる。彼が最初に出会うヨーロッパの伝統は、ルーブル美術館に所蔵してある絵画であった。周りに展開している絵画に圧倒されたとき、彼は一人の女性が模写を行う様を目にする。この場面が、主人公ニューマンのヨーロッパ探求のきっかけとなる。

作者ヘンリー・ジェイムズは、*The American* のニューヨーク版 (1907) に付した序文の中で二つの場面について言及している。一つは物語の冒頭のルーブル美術館に主人公が現れる場面、そして、もう一つはベルガルド一族が主人公に行う仕打ちについての場面である<sup>2)</sup>。作者が自らこの二つの箇所と言及することからすると、これらの箇所が彼にとって重要な意味を持つ

と考えてよいであろう。ジェイムズは後者について特に重きを置いているので、主人公とベルガルド一族との係わりに特に注目することが必要であろう。特に、主人公とベルガルド一族との係わりとして最も大きな意味合いが込められているのは、サントレ夫人との結婚の希求である。ところで、序文には以下の記述がある。

... The great house of Bellegarde, in a word, would, I now feel, given the circumstances, given the *whole* of the ground, have comported itself in a manner as different as possible from the manner to which my narrative commits it; of which truth, moreover, I am by no means sure that, in spite of what I have called my serenity, I had not all the while an uneasy suspicion. (*AM*, 11)

ジェイムズの説明をたどると、主人公ニューマンは様々な仕事をへてひとかどの財をなした人物とされている。彼はヨーロッパにて、これまで彼の人生に欠けていたものを獲得しようとする。特に、彼はまず芸術を自分の手に収めようとする。まず最初に未知なる世界の発見者たる彼がおこなったのは、ルーブル美術館で模写をしている女性からそれを買取ることであった。ニューマンが模写をしている女性に値段を尋ねると、その女性は次のように答えた。

... Then, “*Donnez!*” she said briefly, and

took the open guide-book. In the upper corner of the fly-leaf she traced a number, in a minute and extremely neat hand. Then she handed back the book, and took up her palette again.

Our friend read the number: “2,000 francs.” He said nothing for a time, but stood looking at the picture, while the copyist began actively to dabble with her paint. “For a copy, isn’t that a good deal?” he asked at last. “*Pas baeucoup?*”

The young lady raised her eyes from her palette, scanned him from head to foot, and alighted with admirable sagacity upon exactly the right answer. “Yes, it’s a good deal.

But my copy has remarkable qualities, it is worth nothing less. (AM, 20)<sup>3)</sup>

この女性が“ヨーロッパの芸術”という点からニューマンに大きな影響を与えるとすれば、トリストラム夫妻はヨーロッパの慣習という面からニューマンに適切なアドバイスをする。彼等は、ニューマンのヨーロッパ探求の案内役である。特に、トリストラム夫人は彼がサントレ夫人と知り合うきっかけを作る。ニューマンがベルガルド一族に近づくとき、彼はもう一人の掛替えのない友人を得る。サントレ夫人の兄のヴァレンティンである。ヴァレンティンは、最初のプロポーズの際、思うような反応を得られないで不安な気持ちになるニューマンを勇気づける<sup>4)</sup>。

すでに述べたように、作者ジェイムズはその『序文』の中で、*The American* の重要な箇所として2つの場面に言及していた。今回私はこの拙論を組み立てるにあたり、次の3つの“事件”からこの物語を分析することにする。そして、私は、作者が重視した2つの場面の重要性を明らかにしたい。この3つの場面というのは以下の部分である。その第1は、〈ベルガルド一族からの

拒絶〉である。第2は、それに至る〈サントレへのプロポーズ〉についての考察である。そして、第3は、〈いわゆる、最後の“切り札”〉の断念である。

テキストは、1879年のマクミラン版を定本とした *A Norton Critical Edition The American* を用いる。後に大きく改訂されるニューヨーク版に比べると、それ以前の版の方が評価が高いからである。また、私自身、多くの批評家が述べているように、こちらの版には作者の初期の特徴が現れていて、それゆえ、作品成立時の作者の意図がより直接的に反映していると考えられるからである。

## 第1章 〈ベルガルド一族からの拒絶〉

Person (2003) は、ジェイムズは *The American* をいわゆるメロドラマ仕立てにはしていないと言う。彼は、主人公に“男の強さ (masculinity)”を見つけ出そうとする。物語の中で主人公の結婚の対象として現れるサントレ夫人との間に、主人公は純粋な男女の関係を築く予定であったであろう。しかし、主人公は男性の登場人物のどのかわりの中で、むしろ“弱い男”となっていく。Person は、その端的な現れを、主人公が怒りをあらわにしない人物に作り上げられていることにあると指摘する。ニューマンは、相手側からの一方的な婚約解消に対して、明らかなる怒りを示すことなく終わる。Person は、このような主人公の振舞いを理解するため、“去勢された人物”という概念を持ちこむ。例えば、主人公ニューマンは、結婚の相手をヨーロッパで追いかけるうちに、自己の“男らしさ”を喪失していくのであると解釈する<sup>5)</sup>。

すでに述べたように、クリストファー・ニューマンはこの物語の主人公である。彼は、ひとかどの財産は手にすることができたが、アメリカでは手に入れることのできないもの、これまでの彼の生活にはなかつ

たものを求めてフランスにやってくる。彼の最初のヨーロッパとの出会いは、ルーブル美術館で目にした模写であった。彼はノエミ・ニオシュという女性と出会い、彼女の模写を買い取る“契約”を交わす。この場面（第2章）において、彼は次のようにフランスへ来た理由を述べる。

“I have come to see Europe, to get the best out of it I can. I want to see all the great things, and do what the clever people do.”(AM, 33)

ここで彼が言明しているように、彼はヨーロッパを見るために、偉大なるものごとごとく見るためにフランスにやってきたのである。“賢明なる人々がなすべきことをするために”パリにやってきた彼が最初に訪れたのは、ルーブル美術館であった。そこで彼はノエミの模写に出会う。彼の目には、それがヨーロッパの創り上げた偉大なる物と映ったのであろう。

ニューマンが最初のヨーロッパ探求をはじめてまもなく、彼の身边には“結婚”という別なヨーロッパ探求の必要性が生じる。トリストラムと会って程なく、ニューマンは彼の妻（トリストラム夫人）と対面する。彼女は彼が今だ独身であることを知ると、ニューマンに結婚を促しはじめる。そのときに話の中に出てくるのが、サントレ夫人であった。ニューマンが“結婚”を真剣に考えるようになるまでに注目すべき場面がある。それは、彼が旅行中に会う人物との関わりである。第5章で、彼はボブコックというアメリカ人牧師と出会う。そのくだりを Person は次のように解説をする。

... Can American masculinity really be made that flexible? Central though it is, Newman's relationship with Claire is not the only significant relationship in *The American*, and it will prove valu-

able to examine Newman in relation to other men, especially Benjamin Bobcock and Valentin de Bellegarde. James seems to be trying to liberate manhood from the sort triangulation, or quadrangulation, that complicated *Roderick Hudson*—as if seeking a “pure” heterosexuality (an unmediated male-female relationship) and “pure” homosociality (a utopia male bond). (MS, 69)

（下線は、筆者による）

この主人公にとって、最も重要なことはクレール（サントレ夫人）との結婚である。しかし、彼の物語の中での重要な要素は他にもある。この中の一つがボブコックとの関係である。ニューマンはボブコックとヨーロッパを旅する。しかし、程なく、ボブコックの方から二人で旅することはできないという言葉が聞かされる。ボブコックは、ニューマンのヨーロッパを見るペースが極端に“速い”と言う。彼はまた、彼自身にとっては「芸術と人生とは、きわめて重要な要素である」と言い、ニューマンの「激しく、自己の感覚に素直な」ヨーロッパの探求の方法には着いて行けない旨を伝える (AM, 72)。Person も指摘しているが、ニューマンが物語の中で重要な関わりを持つ人物はもう一人いる。それは、ヴァレンティン・ベルガルドである。関係の濃さという観点からすれば、ヴァレンティンの方が大きな役割を担っていると言ってもよいであろう。物語の主人公とヴァレンティンとの関係は、彼がサントレ夫人に会いに行ったときに始まる。ヴァレンティンは、彼とニューマンの置かれている状況が如何に異なっているか次のように説明する。

“Ah, but your property was your capital. Being an American, it was impossible you should remain what you were born, and being born poor—do I understand

it?—it was therefore inevitable that you should become rich. You were in a position that makes one's mouth water; You looked round you and saw a world full of things you had only to step up to and take hold of. When I was twenty, I looked around me and saw a world with everything ticketed 'Hands off!' ... (AM, 93)

(下線は、筆者による)

ここでヴァレンティンの口から語られるニューマンとの差異は、そのままニューマンとサントレ夫人との埋まらない距離といえるであろう。結末を知るものの目で見ると、この言及は後のニューマンの運命の予知となっている。サントレ夫人との距離は最初から存在していたものである。ヴァレンティンはサントレとの距離を教える人物であるが、また、彼はニューマンにフランスの貴族とは何たるかを教える教師でもある。先の引用箇所が続いて、ヴァレンティンは彼が如何に制約のある世界に生きているかをニューマンに語る。アメリカ人には、自由と可能性とがあるが、フランスの貴族は様々の制約の中で生きることを余儀なくされている。

しかしながら、上述のようなうめきともつかないヴァレンティンの言葉を聞いたニューマンがヨーロッパ探求を断念したであろうか。答えは否である。彼はアメリカが代表している“自由”よりも、ヨーロッパの“伝統の重み”の方に重きを置く。それは、この作品の中で、彼が貴族とつながりをもとうとする理由となっている。一方、ヴァレンティンは、妹のサントレ夫人がどのように生きて行くかに関心を持っていると言う。彼は、ダンデラード夫人という女性の話を紹介する。彼女は夫からの虐待をうけ、今ひとりでホテル暮らしをしている。ヴァレンティンはこのような女性のこれからを見届けたいと言う。

後に、これは彼の妹の今ある状況の仄めかしとなっていることが分かる。ニューマンがフランスで否応なく作り上げる関係は、Personが指摘したように、“3角や4角の”関係であるかもしれない。しかしこれは、物語の進行上重要な要素となる。

物語のクライマックスにおいて、物語の主人公クリストファー・ニューマンは、サントレ夫人との結婚を成就できないで終わる。彼は、サントレ夫人の口から「申し出をうけいられない」という言葉を受け取る(第18章)。そこには彼女の母と兄、すなわちベルガルド一族の反対が大きな影響を及ぼしていた。彼の財力は申し分なかったが、彼にとっては如何ともし難い部分によりベルガルド一族からの拒絶を受けたと考えられる。ここには、アメリカとヨーロッパとの大きな隔たりが大きな要因となっている。その部分は、必ずしも物語の中で明確に描かれるわけではない。我々読者は、登場人物間の会話や振舞いから推察していくのである。敢えて理由を一つ上げるとすれば、ニューマンには“伝統(=古くからあるもの)”が存在しないということであろう。それは、彼の名前が象徴している。

ニューマンにとってこの事件は非常に大きな意味を持つ。彼は、この状況を巡り行動したり発言したりするのである。結末部分では、こうした状況を打破する手立てを手にした彼の行動が物語の中心となる。しかしながら、ニューマンはこの手立てに頼らないことを選択する。これは、ベルガルド一族がニューマンに対しておこなった行為に対する報復を断念したということになり、我々はこの行為の理由付けを求められる。但し、この点は、サントレ夫人の側から考える方が理解が容易である。ベルガルド一族がニューマンに対しておこなった行為という言い方は正しくないかもしれない。正しくは、彼らとその娘に対しておこなった行為といえるであろう。彼らは、その娘をニューマンの近づくことのできない場所、

修道院へ幽閉してしまう。サントレ夫人は、利発で自分で物事の判断をすることのできる女性という印象も受けるのであるが、最終的な彼女の決断は一族の意向に添うということであった。ニューマンは“状況を打破する手立て”すなわち最後の“切り札”を切ることなく終わる。そこには、どのような要因が働いたのであろうか。

## 第2章 〈サントレへのプロポーズ〉

ニューマンとサントレ夫人との出会いには、トリストラム夫人が大きな役割を果たす。

サントレ夫人は、未婚のニューマンの結婚相手として紹介される。彼女は一度結婚してサントレと名乗るようになったが、今は未亡人として、ベルガルド家に戻っている。

ニューマンとこの女性とを“結びつける”役割を担うと思われる人物は数名見受けられる。例えば、ヴァレンティン・ベルガルドがその一人である。彼は、次第にニューマンの無二の親友ようになっていく。また、彼が大きな役割を演じることができ最大の理由として、彼がサントレ夫人の実の兄であるということも挙げおかねばならない。ニューマンは、彼を通じてサントレの人となりを知るようになる。また、ベルガルド一族の一員になるために“超えねばならない”ハードルがあると知るのも、彼を通じてである。彼は非常に信頼にたれる人物であるが、彼も他のジェイムズの作品中の人物のように夭折する<sup>6)</sup>。ヴァレンティンほど大きな影響をもたないかもしれないが、もうひとり注目すべき人物がいる。それは、ノエミ・ニオシュである。彼女は、この物語の冒頭に登場し読者には最も馴染み深い女性であろう。しかしながら、彼女の役割は“間接的”である。彼女は、初対面のニューマンが模写を買いたいと言ったときから、ある種の抜け目なさを発揮する。

それに対して、ニューマンは基本的には彼女の言うことをそのまま受け入れている。そうしたニューマンとのやり取りの中で、彼女は彼女流のニューマンへの“忠告”を行っている<sup>7)</sup>。

第11章に、ニューマンとヴァレンティンとがこの女性について語る場面がある。この中で、ヴァレンティンは彼女の“したたかさ”を指摘する。ニューマンにとってのヨーロッパ探求は、まず、模写を買い取るという契約をノエミと結ぶことから始まる。そして、究極の女性サントレ夫人のを知るようになり、プロポーズをするまでに至る。一方、同時にヴァレンティン・ベルガルドと親しくなる。ここで指摘をしておかねばならないのは、ニューマンとヴァレンティンは、サントレを介して密接に結びついているという点である。ヴァレンティンは、ニューマンに対して様々な忠告を行う。しかしながら、主人公は特にまじめに取り合うことはない。彼が真剣にこのフランスの友人の言葉に耳を傾けるようになるのは、サントレから“結婚が不可能である”との手紙を受け取ってからである。もちろん、ヴァレンティン・ベルガルドという人物は、ジェイムズの作中に頻りに登場する人物として世の中を斜にみて、忠告めいたことを話すときもその口調はひとをからかうようなところがある。ゆえに、最初は相手に真意を理解されないという憂き目に会う。主人公ニューマンが、土壇場でベルガルド一族に“拒否”されたとき、ヴァレンティンは一族の秘密を彼に語る。それは、ヴァレンティンの父親の死に纏わる疑惑であった。これが、ニューマンの決定的な“切り札”となるはずであった。しかしながら、ニューマンはこの切り札を切らずに終わる。

ところで、我々は、結婚できないと言ったサントレの決断を如何に解釈をすべきであろうか。彼女は、自分が生れた“家”を最優先に考えたのであろうか。ニューマン

は、彼が彼女と結婚することにより、彼女を“救うこと”ができると考えた。しかしながら、サントレは、ニューマンを拒否した。これにより、我々は、事態がニューマンの考えたように単純ではないということを知らされる。その中でサントレの決断に最も大きな影響を与えたのは、やはりベルガルド一族そのものであると考えざるを得ない。一方、ニューマンは、ヴァレンティンからその父親の死に不信な部分があるということを知り、それを証拠としてベルガルド一族に叩きつけるつもりでいた。しかし、彼はその選択肢を選ばなかった。ここには、どのような要因が働いたのであるうか。

ヴァレンティンは、ニューマンが本気で妹（サントレ夫人）との結婚を考えているのかと問いただす。その際の、二人の会話からは、様々なことが浮かび上がってくる。まず、ここには、ニューマンのサントレ夫人への確固とした“思い”がある。“... I can't lose my wife, I shall take too good care of her. I may lose my money, or a large part of it; but that won't matter, for I shall twice as much again. So what have I to be afraid of?”(AM, 181) 一方、ヴァレンティンは、ノエミ・ニオシュに“強く引かれている”ことを告白する。“Lovesick, no; it's not a grand passion. But the cold-blooded little demon sticks in my thoughts; she has bitten me with those even little teeth of hers; I feel as if I might turn rabid and do something crazy in consequence...”(AM, 181-182) ヴァレンティンは、フランス貴族と付き合うことが如何なることかニューマンに告げようとする。しかしながら、その警告はニューマンには現実のものとして認識されることはない。以下に、ヴァレンティンとニューマンのそれぞれの言葉を引用する。

... You will see a great many of the best

people in France. I mean the long pedigrees and the high noses, and all that. Some of them are awful idiots; I advise you to take them up cautiously.” (AM, 180)

“You are not afraid it may be rather a mistake for an American man of business to marry a French countess?” (AM, 181)

ヴァレンティンの言う“一族の伝統とプライド”をもつ人々との付き合いが今後の課題であるとの指摘は、ヨーロッパという伝統を持った土地に生きる一族との付き合いを余儀なくされるニューマンへの警告である。ニューマンはそうして事柄に対処できる自信を見せるが、このヴァレンティンの発言はアメリカ人とヨーロッパ人との隔たりの大きさを示すものと考えられる。それは、ヴァレンティンの判断が客観的であるとされるからである。彼はベルガルド一族の人間でありながら、その枠に囚われない視点でニューマンを助ける。また、彼は、ニューマンの信頼できる友人として物語の中で重要な役割を演じる。

では、最後にプロポーズの場面に言及する。ニューマンはサントレ夫人を前にして、彼の気持ちを洩洩と述べる。例えば、次の箇所には彼が彼女のことを“掛替えのない”女性であることが述べられている。

“What I told him last evening was this: that I admire you more than any woman I had ever seen, and that I should like immensely to make you my wife.”(AM, 112)

“... I feel as if I knew you and knew what a beautiful admirable woman you are. I shall know better perhaps, some day, but I have a general notion now.

You are just the woman I have been looking for, except that you are far more perfect.(AM, 112)

ニューマンのプロポーズをうけたサントレ夫人は当惑気味である。それゆえ、ニューマンは彼女を何とか説得しようとする。その中で彼がその材料として使ったのが、彼がアメリカで蓄えた財産を背景として幸せにするという殺し文句であった。ニューマンはサントレが決して幸せでないことを知っていて、彼女を幸せにすることが彼の第1の目標となりつつあった。

しかし、サントレは次のようにして主人公との関係に距離を置こうとする。

“I am very much obliged to you for your offer,” she said. “It seems very strange, but I am glad you spoke without waiting any longer. It is better the subject should be dismissed. I appreciate all you say; you do me great honour. But I have decided not to marry.”(AM, 113)

“There are a great many reasons why I should not marry,” she said, “more than I can explain to you. As for my happiness, I am very happy. Your offer seems strange to me, for more reasons also than I can say. Of course, you have a perfect right to make it. But I cannot accept it—it is impossible....”(AM, 114)

第9章の最後の部分には、ニューマンとヴァレンティンとがサントレを巡って話しをする場面がある。ヴァレンティンは、妹には“結婚できない理由”があると告げる。ヴァレンティンは、機会あるごとにサントレと主人公との結婚が大変難しい状況にあることを告げている。例えば、すでにこの章での論述に当たり指摘したように、ヴァ

レンティンはフランス貴族の世界にニューマンが入っていくことは困難を極めると言っていた。

そして、結局、主人公はベルガルド一族から“拒絶”される<sup>8)</sup>。この結果は、すでに予測がついていたことであると言えるかもしれない。もともとプロポーズの時のサントレの反応には前途多難の兆候はあった。また加えて、ヴァレンティンは“貴族との結婚”という観点から、ニューマンの結婚は多くの困難があることを自覚させようとしていた。

また、“拒絶”の理由を考える際には、トリストラム夫人言葉を注目することも必要であろう。

“... It was your commercial quality in the abstract they couldn't swallow. That is really aristocratic. They wanted your money, but they have given you up for an idea.”(AM, 221)

“Poor woman, she is cruel. But of course you will go after her and you will plead powerfully. Do you know that as you are now,” Mrs. Tristram persued with characteristic audacity of comment, “you are extremely eloquent, even without speaking? To resist you a woman must have a very fixed idea in her head....”(AM, 221)

### 第3章 くいわゆる、最後の“切り札”

さて、サントレから引き離されたニューマンは最後の“切り札”を使うこともできた。ベルガルド一族については黒いうわさがあった。サントレの父が死に至ったのはその妻と息子による毒殺による、というのがそれである。ニューマンはその証拠のメモを手に入れるのだが、それを使うことをしなかった。なぜ、ニューマンは断念した

のであろうか。

例えば、ニューマンは復讐をおこなうことを必要としなくなったと考えてみよう。パリに着いたばかりの頃の彼であれば、不条理な状況におかれるサントレ夫人の側に立ってベルガルド一族と戦いを挑んだであろう。しかしながら、彼はそれをしなかった。彼にはその必要がなくなったのであろうか。彼のヨーロッパ探求、具体的にはパリの探求において、彼は、長い伝統を持つヨーロッパにはアメリカとは異なる、またアメリカには存在しない“人々の意識”が存在するのだと理解しえたのかもしれない。彼が結婚を考えたサントレは、家族の求めるまま修道院に入る。彼女にとっては、家族というものが1番に優先すべき存在であった<sup>9)</sup>。

主人公の判断は次のようであったのかもしれない。ヨーロッパでは、自己よりも“家”が優先される。これは、自己を何よりも優先させることのできるアメリカとは正反対であった。パリでの生活経験が彼にこのような意識を持たせることになったと考えるのもよいであろう。Rowe (1998) はニューマンの“無知さ”を指摘しているが(OH, 66-7)、それゆえ、ニューマンはヨーロッパを自己の世界とは異なる存在として自覚することができたのであろう。

結末の3つの章(第24、25&26章)には、最終的な主人公の決断の理由が述べられていると思われる。まず、主人公の脳裏に浮かぶのは、彼をサントレから引き離れたベルガルド一族への復讐を果たすということである。彼は、その思いを胸に彼の友人のもとに向かう。そして、友人のヴァレンティンから、彼はサントレの亡き父が今はの際で書きとめたというメモを手に入れる。これは最後の“切り札”として彼の手元に残される。しかし、彼は結局この“切り札”を使わないことを選択する。この点には大きな疑問が残る。なぜならば、彼は、このメモのことを母親のベルガルド夫人と

兄のベルガルド侯爵とに伝えているからである。

第26章には、最終的な選択に至るニューマンの心の葛藤が描かれる。例えば、

... From without Newman could see its upper windows, its steep roof and its chimneys. But these things revealed no symptoms of human life; the place looked dumb, deaf, inanimate. The pale, dead, discoloured wall stretched beneath it far down the empty side street—a vista without a human figure. Newman stood there a long time; there were no passers; he was free to gaze his fill. This seemed the goal of his journey; it was what he had come for.... He leaned his head for a long time on the chair in front of him; when he took it up he felt that he was himself again. Somewhere in his mind, a tight knot seemed to have loosened. He thought of the Bellegardes; he had almost forgotten them. He remembered them as people he had meant to do something to. He gave a groan as he remembered what he had meant to do; he was annoyed at having meant to do it; the bottom, suddenly, had fallen out of his revenge. Whether it was Christian charity or unregenerate good nature—what it was, in the background of his soul—I don't pretend to say; but Newman's last thought was that of course he would let the Bellegardes go. (AM, 305-306)

ニューマンはベルガルド一族のことをすっかり忘れてしまっていた。しかし、たまたま訪れた教会で、「もはや彼等には拘らないでいよう」という思いに至る。この認識に至るまでに、前振りとして、彼は、すでに「これが自分の行き着く先だ」や、



「今はすべてが終わった。これでやっと自分も一息着ける」という思いに至っていた。  
(第26章)

一方、トリストラム夫人は次のようにニューマンの変化を見て取る。

She presently asked him what he had done after leaving her.

“Nothing particular,” said Newman.

“You struck me,” she rejoined, “as a man with a plot in his head. You looked as if you were bent on some sinister errand, and after you had left me I wondered whether I ought to have let you go.”

“I only went over to the other side of the river—to the Carmelites,” said Newman.

(AM, 307)

最後にトリストラム夫人が言うように (AM, 309)、ニューマンは“余りにも善良は人物”なのであろうか<sup>10)</sup>。結婚問題については、サントレの上の兄と母親とが大きな関与を示す。彼らがニューマンをベルガルド一族に受け入れないことを選択した理由は物語の中でさほど明確ではない。彼らは、サントレを修道院へ“幽閉する”ことでニューマンとのつながりを断つという行動に出る。家族によって“幽閉”の憂き目をみる少女と違ってすぐに浮かぶのは、*The Portrait of a Lady* のパンジーであろう。このタイプの登場人物は、絶対的な力をもつ肉親の命令に反旗を翻すことはない。サントレもこの例に漏れない。

Rowe は、この作品の中での作者のスタンスを否定的なものと捉える。彼によれば、ジェームズは、アメリカの民主主義について将来専制的なヨーロッパの犯した罪を再び繰り返すと言っているように思われる。そもそも、それはアメリカを建国した人々が避けてきたことであった。ジェームズは、

それを女性の置かれた運命を描くことで我々に伝えようとする。女性は父性社会の中でともすれば犠牲者となることを避けようと奮闘する。それゆえ、彼女たちは不幸である。その中であのルーブル美術館で模写をしていたノエミの取る“大胆な行動 (coquetry)”は、そうした状況を打破している数少ない例証となっている。それは、男女の恋愛を通じておこなわれている。主人のニューマンの行動、すなわち、サントレとの結婚を申し出るということは、犠牲者となる女性を救い出すという意味合いを帯びる。しかし、ニューマンはこの“女性を救い出す”という行為を貫徹できないで終わる。(OH, 67-8)それは、ベルガルド一族の妨害を受けたからと考えることができるが、それだけでは不十分である。彼には“切り札”があった。彼は、ベルガルド一族が世に公表されては困る事実を知るに至る。彼は、サントレの父が死に至ったのは、その妻と息子による陰謀があったという証拠を得る。しかしながら、結果としては、彼はこれを世に出すことはしなかった。このことについては、ニューマンの判断がどのような理由から起こったのか検証する必要がある。主人公は、結婚によりサントレを“救い出す”ことができたかもしれない。しかし、別な角度から見ると、彼自身に欠けているものを補うことでもあった。彼はアメリカでは見出せなかったものをヨーロッパで手に入れようとしていた。つまり、“犠牲者となる女性を救い出すこと”だけではなかった。

その前に、ここでフランスでの彼の良き相談相手となっているトリストラム夫人の反応を見ておきたい。ニューマンの“最終的な行動”をベルガルド一族は想定していた。その判断の背後には、彼らがニューマンの善良さを信じて疑わなかったからである。トリストラム夫人は、以下のように語る。

After Newman had sat a while longer, looking very somber, she went on: "You are not so good a man as I thought. You are more—you are more—" "More what?" Newman asked. "More forgiving." "Good God!" cried Newman; "do you expect me to forgive?" "No, not that. I have not forgiven, so of course you can't. But you might forget! You have a worse temper about it than I should have expected. You look wicked—you look dangerous." (AM, 305)

再び最後の場面に言及する。トリストラム夫人はニューマンの消息を問う。また、彼女は彼が何か企んでいるのではないかと疑いをかける(AM, 307)。ニューマンは、最後にこのトリストラム夫人の前で、最後の切り札であるサントレの父が書いたメモに火をつける。彼はこの行為により、ベルガルド一族との関係を断ち切る。そこに我々は如何なる意味を見出すべきであろうか。

#### 終わりに

ニューマンは、ベルガルド一族が彼のことを恐れているという理由から彼らを許そうとする。これが、最後のニューマンの立場であった。ニューマンは、いわゆる“復讐”をすることをやめる。しかしながら、彼の中では何もしないことが復讐であった。トリストラム夫人は彼のこのような態度から、彼の対応を“善良”と表現した。

物語が最後に至ったときも、商売で財をなしたことへの後ろめたさは彼にはない。少なくとも、彼の理解としては、彼が商売で財をなしたことで誰に迷惑をかけたわけではないという自覚がある。サントレを悲しませたくないという思いが彼の最後の行

動を促したと、考えるべきであろうか。“ヨーロッパはアメリカとは異なる”ということが彼の中で明確に理解されたのであろうか。

ニューマンは当初の“憂鬱”な気持ちから回復し始めていた。彼は“変えることのできないもの (the unchangeable)”は変わらないということを理解し始める。彼はまた自分がベルガルド一族になした行為の正当性を自己の道德観に照らして考えるのであるが、彼の結論は以下の箇所に端的に表現されていると思われる。

If he had been too commercial, he was ready to forget it, for in being so he had done no man any wrong that might not be as easily forgotten. He reflected with sober placidity that at least there were no monuments of his "meanness" scattered about the world. If there was any reason in the nature of things why his connection with business should have cast a shadow upon a connection—even a connection broken—with a woman justly proud, he was willing to sponge it out of his life forever. The thing seemed a possibility; he could not feel it, doubtless, as keenly as some people, and it hardly seemed worth while to flap his wings very hard to rise to the idea; but he could feel it enough to make any sacrifice that still remained to be made. As to what such sacrifice was not to be made to, here Newman stopped short before a blank wall over which there sometimes played a shadowy imaginary. He had a fancy of carrying out his life as he would have directed it if Madame de Cintré had been left to him—of making it a religion to do nothing that she would have disliked.(AM, 301-302)

(下線は、筆者による)

例えば、これは次のように言うことができるであろう。「商売をしていたということがサントレとの結婚に影響を及ぼすのであれば、自己の人生からその痕跡を取り除くつもりである。しかしながら、今それをしたところで、意味がないように思える。むしろ、ある犠牲的な行為をすることの方が意味あることではないか。ただし、その犠牲となる相手のことを考えてみたとき、彼は自分の人生を全うすることが今なすべきことなのだという思いに至った。それは、彼がサントレと結婚した場合に、心に決めていたことである。彼はサントレが嫌うことはすまいと思っていた。」

彼は、このように自分の気持ちに終止符を打った。ここには、彼の決意がありありと描かれている。今の彼には、例のメモを明るみに出して“復讐”を果たそうという思いはない。しかしながら、彼の最後の振舞いを理解するためには、彼の側にひとつの“決意”のようなものの存在を見つける必要があるだろう。ひとつは、たとえその家族に恨みを感じていてもサントレに対する愛情は消えることなく、彼女のことを最優先に考えたとき証拠を公にすることは彼女が悲しむであろうという判断である。また、もうひとつは、今の彼自身に一番必要なものはヨーロッパの“伝統”であると思えばフランスに来たものの、それは決して彼の手の届くものではないとの自覚である。

彼には今の彼自身があることへの後ろめたさはない。例えば、彼は、商売で財をなした自分自身を恥じてはいない。むしろ、今の彼はヨーロッパにはアメリカ人が超えることのできない“壁”があると理解しているのである。

## 注

- 1) 秋山正幸『ヘンリー・ジェームズの国際小説研究 - 異文化の遭遇と相剋 -』(南雲堂) pp.40-2.の中で、秋山はR.W.B.Lewisの著書 *The American Adam*(1955)を援用して主人公

ニューマンをアメリカのアダムになぞらえている。

- 2) James W. Tuttleton, ed. *A Norton Critical Edition The American* (New York: W. W. Norton & Company, Inc., 1978) 3, 6 以後、この作品は略語 *AM* であらわす。
- 3) *AM*, 20 また、この引用に続けて以下の箇所がある。これは“模写をする女性”の人となりを知るためには無視できない描写である。また、この会話には主人公の名前が話題になっている。Christopher というのはここでの話題のように、アメリカ大陸を発見した Christopher Columbus のもじりである。ゆえに、その名には“未知なる世界の発見者”という意味が込められていると考えたい。その名のように、彼はフランスで彼にとっての未知なる領域に入りこみ、彼にとっての新しい“発見”とも言える経験をするからである。
- “Monsieur is constant; I understand perfectly. It's a rare virtue. To recompense you, you shall have your picture on the first possible day; next week—as soon as it is dry. I will take the card of monsieur.” And she took it and read his name: “Christopher Newman.” Then she tried to repeat it aloud, and laughed at her bad accent. “Your English names are so droll!”
- “Droll?” said Mr. Newman, laughing too. “Did you ever hear of Christopher Columbus?”
- “*Bien sur!*” He invented America; a very great man. And is he your patron?”
- “My patron?”
- “Your patron-saint, in the calendar.”
- “Oh, exactly; my parents named me for him.”
- “Monsieur is American?”
- “Don't you see it?” monsieur inquired.
- “And you mean to carry my little picture away over there?” and she explained her phrase with a gesture.
- “Oh, I mean to buy a great many pictures—beaucoup, beaucoup,” said Christopher Newman. (*AM*, 21)
- 4) ヴァレンティンは、サントレ夫人が曖昧な返事をして、それは必ずしも拒絶ではないということニューマンに伝えようとする。今のサントレの立場では、すぐさまニューマンの申し出を受け入れられないからである。(*AM*, 115-

116)

- 5) Leland S. Person. *HENRY JAMES and the Suspense of Masculinity*. (Pennsylvania: Univ. of Pennsylvania Press, 2003) の Chapter 2, “Nursing the Thunderbolt of Manhood in The American” の p.70以降に記述がある。特に、p.79, p.80, p.82, p.84,そして p.85に詳しく描かれている。以後、この批評書は略語 MS であらわす。
- 6) ジェイムズの作品には長生きできない登場人物が存在し、その人物は死の後も他の登場人物たちに、特に、ヒロイン・ヒーローに大きな影響を及ぼし続ける。その代表的な人物は、*The Portrait of a Lady* のラルフ・タチェットである。
- 7) 第15章に以下のように記述がある。  
 “I mean it in this way. First of all, he never offered to help me to a dot and a husband.”  
 And Mademoiselle Nioche paused, smiling.  
 “I won’t say that is in his favour, for I do you justice. What led you, by the way, to make me such a queer offer? You didn’t care for me.”  
 “Oh yes, I did,” said Newman.  
 “How so?”  
 “It would have given me real pleasure to see you married to a respectable young fellow.”  
 “With six thousand franc of income!” cried Mademoiselle Nioche. “Do you call that caring for me! I’m afraid you know little about women. You were not gallant; you were not what you might have been.”  
 Newman flushed, a trifle fiercely. “Come!” he exclaimed, “that’s rather strong. I had no idea I had been so shabby.”  
 Mademoiselle Nioche smiled as she took up her muff. “It is something, at any rate, to have made you angry.”(AM, 176)  
 この引用にあるように、ノエミは、ニューマンに対して“あなたは女のことをよく分かっていない”と言う。彼女はきわめて自由にニューマンという人物と会話を交わす。その中で、多少礼儀をかいても意に介さないところがある。ニューマンは、このような女性であっても好感を抱いたという理由で模写を買うことを決意した。
- 8) Carolyn Porter. “Gender and Value in *The American*” Banta, Martha ed. *New Essays on The American*. Cambridge Univ. Press, 1987. 114には、作品 *The American* には経済

- 学でいう“商品の売買”の理論が当てはまるという指摘がある。例えば、Porter は、父親の権威の失墜を述べる際に、サントレ夫人はベルガルド家のために“商品として売られた”と解釈している。サントレ夫人は、ベルガルド一族に“金”をもたらすための道具として結婚させられ‘サントレ’という名を名乗るようになった。ニューマンの役割としては、サントレと同様に、ベルガルド一族に“金”をもたらすということである。しかし、彼の場合は、サントレにあった“貴族”という肩書きはない。ここが大きな違いである。最終的に彼がベルガルド一族に拒絶される一因がここにあるのであろう。
- 9) Rowe は、この彼女の決断はヨーロッパの父系社会のなせる技であるとしている。  
 (John Carlos Rowe. *The Other Henry James*. Duke Univ. Press, 1998. 69) 以後、この作品は略語 OH であらわす。
- 10) Rowe も、主人公ニューマンを“余りにも”善良は人物と位置付けている。(OH, 71)

## 参考文献

- 秋山正幸 『ヘンリー・ジェイムズの国際小説研究 -異文化の遭遇と相剋-』南雲堂, 1993.
- Banta, Martha ed. *New Essays on The American*. Cambridge Univ. Press, 1987.
- Bloom, Harold ed. *Modern Critical Views Henry James*. Chelsea House, 1987.
- Cady, Edwin H, & Budd, Louis J. eds. *On Henry James*. Duke Univ. Press, 1990.
- Dawidoff, Robert *The Genteel Tradition and the Sacred Rage High Culture vs. Democracy in Adams, James, & Santayana*. The Univ. of North Carolina Press, 1992.
- Fowler, Virginia C. *Henry James’s American Girl The Embroidery on the Canvas*. The Univ. of Wisconsin Press, 1984.
- The Henry James Review*, VOLUME 25, NUMBER 2 SPRING, 2004 The John Hopkins Univ. Press.
- Leavis, F. R. *The Great Tradition*. Peregrine Books, 1983.
- Person, Leland S. *Henry James and the Suspense of Masculinity*. Univ. of Pennsylvania Press, 2003.
- Rowe, John Carlos *The Other Henry James*. Duke Univ. Press, 1998.

**ABSTRACT**

## A Study of *The American* How Our Hero Plays His “Best” Card

Yasushi NAKAKUBO

The focus of this essay is an examination of Henry James's *The American*. *The American* is a story which shows how our hero decorates himself with his previously unknown aspects of European traditions. An American businessman called Christopher Newman goes to Paris, France, and struggles to find out something he has never experienced in his home country. He has been looking for business ventures. However, after arriving in Paris, he greatly changes himself and attempts to see, feel and touch the historical and traditional values Europe has conserved for a long time. The author explains how this story proceeded in his “later” preface. James seems to have referred to two main events: an “encounter” of our hero with a copier at the Louvre, and a “refusal” by the Bellegardes of his marriage proposal to their daughter, Madame de Cintré. While he receives a negative response from Madame de Cintré, he comes to learn a secret story about the French aristocratic family. Newman has a great card in hand; however, he never resorts to playing it. The question now becomes, ‘Why did he throw away such a good card?’

I put forth three remarkable scenes in order to clarify why he gives up. First, I will look into what decisions lead the Bellegardes into refusing Christopher Newman. Second, I will trace back to what makes our hero propose to Madame de Cintré. Finally, I will examine what the so-called “playing the final card” means to him.

In conclusion, I comment on the hero's final decision. He forgives the French aristocratic family rather than pursuing revenge. This seems to have been a painful and serious decision for him. He completely understands that there remains a great distance between his own home country and Europe, but he still would prefer the happiness of his beloved woman.